朝日新聞　２０１４年９月１９日　夕刊　３ページ　大阪本社

失った歌声を もう一度

韓国人歌手を支えた友情　来月公開「ザ・テノール」

「ザ・テノール 真実の物語」の一場面

歌声をもう一度――。がんで声を失った韓国人テノール歌手ベー・チェチョルと、彼を支え続けた日本人の実話を映画化した「ザ・テノール」が公開される。モデルになった音楽プロデューサーの輪嶋東太郎(51)は、「結局、感動で人は動く。文化の力で冷え切った人間同士や国の関係を温めたい」と話す。

チェチョルは1969年生まれ。イタリアの音楽院を首席で卒業し、欧州の名門オペラハウスで活躍。「アジア史上ナンバー1のテノール」と期待をかけられていた。

2人は2003年に出会い、チェチョルは日本でも順調にファンを増やしていった。だが05年9月にドイツで公演中、声がかすれて降板。甲状腺がんだった。手術は成功したが、大事な声を失った。輪嶋は支援に奔走し、多くの日本人が手を差し伸べた。チェチョルは京都大学で声帯機能回復手術を受け、再び舞台に立てるまでになった。

「振り返ると、完璧なシナリオに基づいて作られた映画を客席から見ているようだった」と輪嶋。韓国の映画会社から映画化をもちかけられ、自身もエグゼクティブプロデューサーとして参加した。「映画の出来次第では、ベーさんがこれから果たすべき使命に影響する。必死でした」

「感動で人は動く」日韓つなぐ実話

心に残っているチェチョルの言葉がある。「人生で何が一番大切か、病気をしてわかった。もし病気になっていなかったら、今日も何のために歌うのかもわからずにステージに立ち、拍手をもらっていた」

輪嶋は「彼は昔は偉大なオペラ歌手だったけど、今は人の心の苦しみを救える芸術家になった」と語る。

映画ではチェチョル役はユ・ジテが演じたが、劇中の心にしみる歌声は本人のものだ。輪嶋がモデルの日本人は伊勢谷友介が演じた。来月の釜山国際映画祭で特別上映され、日韓の出演者やスタッフが一緒にレッドカーペットを歩く予定だ。

来年は日韓国交正常化50年。「愛の反対語って、憎しみではなく無関心。多くの日本人が韓国に無関心だった過去よりも、今はましだと思いたい」と輪嶋。映画は10月11日から公開される。（伊藤恵里奈）

病を知って駆けつけた輪嶋東太郎(右)とチェチョル＝2005年12月、ドイツ、輪嶋氏提供

28日、大阪でチェチョルの公演

28日午後3時から、大阪市北区のザ・シンフォニーホールでチェチョルのコンサートが開かれる。A席5千円、B席4千円。問い合わせはエス・ピー・エース(06・6204・0412)。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。